The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	食のほころび : あるいは、食べることと食べさせてもらうこと
Author(s)	鷲田, 清一
Citation	臨床哲学. 2002, 4, p. 107-119
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/10184
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

食のほころび

――あるいは、食べることと食べさせてもらうこと

鷲田清一

1　はじめに

食べさせてもらうということほど、心を動かすものはない。感動という意味ではない。心がはげしく揺らいでしまうという意味でだ。

母に、あるいは愛するひとに、あるいは看取ってくれるひとに、食べさせてもらう、あるいは最後の水の一雫で唇を湿してもらうというのは、それこそはらわたに沁み込む想いがする。じぶんをほどいて、それこそ馬鹿みたいに口をあんぐりできる。あるいは、身を他者にゆだねきる、と言ってもいい。

が、じぶんが独力で食べられなくなってしかたなく食べさせてもらうというのは、どういうかたちでであれ、悲しいものである。面とむかって食べさせられるときはもちろん、横を向いて（なにかに気をとられて心ここにあらずという状態で、あるいは他の患者の様子が気になってそちらに眼を逸らしながら）スプーンを差し出されたときは、屈辱におもわず口を閉ざしてしまうのではないだろうか。いやいや、そもそも食べる姿をだれかに脇から見つめられるというのが、どこか辛いものである。おいしそうに舌鼓を打ちながら食べるのならまだしも、いのちをつなぐために、ただそのためにだけ食べているところを他人に見られるというのは、悲しさや羞ずかしさを通り越して、存在しているということの惨めさの窮みへとひとを追いやるのではないだろうか。

生きるためにはなにかを食べなければならない。食いつづけなければならない。これはだれをも縛っている、生の究極の条件である。とすれば、わたしが食べているところを見るひともまた食べつづけなければならない以上、食べるところを見られることを羞ずかしがる必要など毛頭ないはずなのに、それでも、その条件にじかに曝されている光景を他人に見られることが、悲しさ、羞ずかしさ、惨めさといった感情にひとを追いやるのだとしたら、いったいその理由はどこにあるのだろうか。存在するということじたいが羞ずかしいこと、惨めなことだとでもいうのだろうか。

もういちど言う。生きるということは食べつづけることである。ひとはときに、修行として、あるいは祈りとして、食を断じることはあっても、たかが数日である。たかが、と言ったが、もちろんそのダメージの深さは、そこから食を戻す過程に細心の注意が要ることからもうかがえる。食わなければ生きられないという、これは人間の核にある事

実である。が、食べること、味わうことに人間の生存や体験の意味が凝集しているというのが、さらにもっと核にある事実であるようにおもえる。だからこそひとは、食わなければ生きられないという絶対の必然をも、ときに頑として拒みもするのだ、と。

2　食べることを拒む

あるうら悲しい話から――

ミルクの温度があまり高いか、あるいは低すぎるか、あるいは調合の具合が変えられている時、乳児は哺乳びんのミルクをのむことを拒むことがある。……発達初期の精神病理に関する多くの知見の教えることは、環境のごくわずかな昏い変動や、母親の態度の些細な冷たい変化が、すでに乳児に、彼を傷つける気分変調をおこさせ得るということであり、その最初の徴候は食物の拒絶ということである。乳児はもし彼が全く何もしたくない時には、あるいは愛情を失った時には、食べることへの関心もなくなることがある。……人間はわずかな感情の浮沈のために惑わされる。

その他に人間的な「吟味」のできないものとしては、老年性痴呆の患者などの「食べることしか楽しみのない」生活をあげることができる。また精神病院での食事時のもの悲しい光景は、ひごろはのろのろと動いている患者たちの恐ろしい速度の「早食い」である。また精神分裂病者や老年性精神病者における、食物に毒が盛られていると確信している被毒妄想は、人間学的には信頼というものの喪失のすさまじい表現に他ならない。

（霜山徳爾『人間の限界』）

母親の気持ちがじぶんに向いていないこと、じぶんが粗末にされていることを、その存在全体で感知して口を開けることを拒む乳児。世界をその味わいによって、好悪によって、分けるということを放棄し、その存在になんの「尊さ」もなくただ生きているだけという状態のなかにじぶんを封じ込めるかのように、食うことを急ぎばやに「済ます」老人。あるいは、食への関心を喪失し、食べ物を介護スタッフにスプーンで押し込まれ、そしてまさにそのさなかにそのスタッフの眼が別のひとに注がれていることにふと気づき、仕方ないとは判りながら、これまた仕方なくさらに食欲を遠ざけてしまう老人。

言うまでもないが、これはしかし、人生の曙とか黄昏として思い浮かべられるようなとき季節の情景ではない。こんなにまでして生きることがどうしても耐えがたいとおもうとき、あるいはその存在がひとびとのあいだでないがごとき扱いを受けたままであるとき、あるいはじぶんの存在の軸とでもいえるものが消え失せただ憔悴のなかに身を置くしかないとき、そのように存在の乏しさに打ち棄てられていると感じざるをえないときにも、ひとは食うことを拒む。その存在が塞ぎ、食うということへと向かわなくなる。いや、ひとはそのとき、じぶんがまだ食いうるという事実じたいを拒もうとするのであ

ろう。そしてその拒みすらもが、やがて必然によって押し流されるとき、つまり食べることを拒むその意思が生きるとは食うことだという必然に抗いえず、それにからだごと屈するとき、要するにいちばん惨めなときにすらも何かを口にしてしまうときに、ひとは情けなさの極みへと追いつめられる。情けなさ、つまり感情を喪失してしまうのである。おそらくそれが、ひととしての最後の、拒みなのであろう。……感覚麻痺。

人間的な「吟味」のできない悲劇的な状況、たとえば史上に多くの記録の残る恐ろしい大飢饉——そこでは救荒植物すらほとんど一草もとどめなかったといわれるが——の状況、また迫害され、捕えられ、食物もろくに与えられなかったキリシタンの記録——そこでは糞便からわく蛆すら口に入れたといわれる——、またアウシュヴィッツなどのナチスの強制収容所の餓死に至るまでの強制労働の報告——これらにおいては、人間相互の信頼や、人生への信念、あらゆる教養、あるいは信仰がいわば試みに逢わされるのである。そこでは、ものを「吟味」しつつ生きる人間に与えられる、人間存在の可塑性の秘密が強制的に奪われてしまう。したがって人間は醜悪きわまりないものにもなり得る。

ここで霜山が「人間の可塑性の秘密」と言っているもの、それは、世界を分けるということ——味わい分ける、嗅ぎ分ける、見分ける、聴き分ける——、そしてそれによって世界から何かを選ぶというところにひとの生存がかかっているということであろう。じぶんにとって望ましいものを選び、受け入れがたきものを拒み、他人とのつながりや別れを選ぶ……、そのなかにこそひとがひとりひとり取り替えようのない「だれか」であるという事実の基礎があるからだ。分けることと選ぶこと、つまり感覚とはけっして感覚情報の入力といったことではなくて、何かを対象として迎えにいくことなのである。このことを霜山は次のようにも言い表している。

生命の流れは「味わい」の中に、いわばせきとめられるのである。なぜならば吟味しながら味わうことは、何らかの或る（著しい）目立つものに向けられるからであり、それを強調し、あらわにするからである。かくして人間の味覚は、対話への前段階なのである。更にもっと明らかにいうならば、それは或るものを愛しつつ行われる対話への前段階乃至は萌芽ということができよう。なぜならば愛しつつなす対話においては、単にそっけなく或ることを告げるということはなされず、二つのもの（者、物）の交渉のこまやかな情緒的洗練化がなされるから、味覚というものもその予兆であるといえるのである。

さて、分けることのなかで味覚というものが格別の意味をもつのは、視覚や聴覚とは異なってたしかにそこに物との隔てはないのだが、かといって対象性もないということではないからである。世界を味わい分ける、つまり吟味するということで、ひとはその生き物としてのあり方にひとつの偏位をしるしたのである。じぶんが触れる物たちを対象としてそれにかかわるようになったのである。ドイツの哲学的人間学はそれを、「周界」

を「世界」に変えることと表した。物の加工、つまり技術というものが、言葉とならんで文化のしるしとされるのは、言葉がひとの発声を体系的に変換するのとおなじように――ひとは激痛のさなかでも「ぎゃー」とは唸らず「痛い」と叫ぶ――、それによって世界が建物や畑や都市や「自然」として意味づけられ、編みなおされるからである。隔たりはないが対象性が生まれつつあるというのは、だからそういう文化の初動がそこにあるということだ。乳児はあらゆる物を口に入れて確認する。吸ったり、噛みついたり、舐めたり、しゃぶったり、含んだり、吐き出したり、ときに戯れたり……。それを受け入れるか、拒むか。世界がじぶんにとって意味をもちえなくなったとき、ひとはその初動に帰還し、そしてその最初のしるしそのものを抹消しようとするのではないか。「「意味」が見出せなければ「限界」は哀しい姿をとる」とは、おなじ霜山の言葉である。

3　口のまぐわい

しかし、先にいくつかの例に見たように、その「限界」が感覚の初動という場面に、麻痺という屈曲したかたちで現われ、さらに、ひとをそこへと追いやるのが、「じぶん」というものがひとびとのあいだで根こぎにされているという想い、つまり「じぶん」というものに位置をあたえている社会生活のその初動の破綻であるのは、どうしてなのだろう。

「じぶん」の成立というのはひとつの損傷であると言えるかもしれない。母からの、世界からの剥がれ、そういうものとして「わたし」は誕生するからである。その剥がれは、しかし距離の設立でもある。わたしが「わたし」となるのは、わたしが他の多くのひとたちとともに「わたし」であることを了解することだからだ。「わたし」というものがわたしだけのものではなく、だれもがじぶんを指し示すときに「わたし」と言ってよいこと、「わたし」はあなたにとっては「あなた」であり、「あなた」はあなたにとっては「わたし」だということ、そのことの了解のなかに「わたし」は生まれる。〈他者の他者〉としてのじぶんの了解、その上に「わたし」が編まれるのだとしたら、わたしが「わたし」として生まれたときには、唯一のものとしての「わたし」はすでに死んでいるということになる。わたしは誕生とともに死ぬ。たがいに別個の存在として「わたし」を了解しあう、そういうたがいの隔てのなかで、ひとはすでにじぶん自身とも隔たっているのだ。ということは、母親の関心がじぶんから逸れている、そう感じて口を噤んだ乳児の哀しみは、誕生以来、ずっとひとの想いを苛みつづけているということだ。「わたし」の存在から疼きは外れることがない。だからひとは、その疼きを抑えきれないとき、つまりじぶんが根こぎにされていると感じるとき、その「可塑性」を失い、その存在の初動の封鎖へとじぶんを追いつめる。食べようという衝迫が消えてしまうのである。

一般に、物に触れるということは、ある距離を置いた対象への関心というものがなけ

れば起こらない。表面をそっと撫で、擦って、きめを感じ、熱を感じ、重みを確かめ、やんわりと押して、ときにとんとんとつつき、あるいは掌のなかで転がす……。それを壊さないように、そっと。そのためにはしかし、指が、腕が、状況に応じ、力を込めたり緩めたりと柔軟に対応できないといけない。霜山のいう「人間の可塑性」というのは、そういう緊張／弛緩という力の可塑性でもある。

愛撫とはおそらく、そういうものである。何かに触れるということはじぶんが何かに触れられてもいるという感覚なしには起こらないのであるから、愛撫とは、距離の消去それじたいのなかにずっととどまっていたいという欲望であるかもしれぬ、とさしあたって言える。が、愛撫はつねに挫折する。まさぐりは距離を必要とするからである。距離の消去それじたいのなかにとどまっていたいという欲望のなかにあるときには、まさぐるという行為のなかに孕まれている距離が、剥がれ、奪われ、取り残されとしてしか感受されない。距離が、対象への愛や関心の前提としてではなく、抹消すべき隔てとして感受される。そして隔てを抹消すればそこには激突という関係しか残らない。愛撫は知らぬまに痛みに変わっている。世界からふわふわした可塑性が消え、壊しても壊しても壊し足りないものに変わる。

愛撫は、他者との距離の消去として見惑われる。が、そのとき、愛撫は可塑性の消失としてしか終わらない。現代の若い女性たちの性にふれてそこに「求められないと寂しい」「求められたら断れない」といった依存の感情を見る香山リカ、「最大のタブーはもはやセックスなどではなく、《愛》なのかもしれない。セックスは今や、そうした愛の親密さや感情的な交流を避ける口実になっているのではないだろうか」という伊藤俊治の指摘が、ふと浮かぶ。くっついてもくっついても足りない……。その心情は、痩せても痩せても足りないという、ダイエット症候群にもつながっているのだろう。「じぶん」の根こぎという心情は、社会からの期待（＝厳命）への密着としての「過剰適応」というかたちをとり、それが摂食行動という「限界」にぶち当たって、存在の初動であるあの「味わい」を麻痺させる……。

意味の不在が「限界」に哀しいかたちをとらせると、霜山は書いていた。意味の不在が感覚麻痺として現象する。西欧語のセンスが「感覚」と「意味」という意味をあわせもっていることには、深い意味があるようにおもう。フランス語のsensはさらに「方向」という意味もあわせもつ。見ること、聴くことだけでなく、対象との密着である触れることも、まさぐりという、何かに向かう志向性を欠けばなりたたなかった。では、口という、いのちのもっとも基幹的な部位においてはたらきだす志向性、つまり食べるということへの傾きを封じ込めるものはいったい何か。

４　いただけないこと、のめないこと

命令という、命じられる者だけではなく命じる者そのひとにも深く残る〈棘〉について、つぶさに語ろうとしたエリアス・カネッティは、その著『群衆と権力』（岩田行一訳）のなかで、「逃走」とういかたちで鹿を動かす命令について、ほぼ次のように書いている。命令というのは、その原始の形態においては、一方が他方を脅かすというかたちで二匹の異種動物のあいだに起こる。そのとき逃走は「死刑判決に対する、最後の、そして唯一の控訴」である。「もっとも古い命令、人類が誕生するはるか以前に下された命令」は死刑判決であり、そのためには犠牲者はやむをえず逃走するのだ、と。

人間が下す命令においては、こうした死への怯えは消えているようにもみえる。約束や契約から、命令は合理的に下されるようにもみえる。そういう見かけは「買収」という事実からくる、とカネッティはいう。一方が食糧を与え、他方がそれを受け取る、つまり主人が奴隷を、母親が子どもを「養う」というつながりが死の緊迫を覆い隠すのだが、一方が他方の生き死にを握っているという事実に変わりはない。そのかぎりで、「死刑判決の残酷さが消えやらずにのこっている」。そしてそれがちらっとでも顔をのぞかせたとき、ひとは「傷つく」。

愛する者の言葉にも、さりげない命令、穏やかな命令が潜んでいる。一方がそれを命令形ではなく、命令ともつゆ思わずに要求したことが、他方に折にふれて疼く根深い傷痕を刻んでしまう。あるいは倫理。ひとであるかぎりの守るべき最低の約束事とおもわれることが、それに進んで従おうとする主体にさえ、見えない傷を残す。あらためて言うこともないが、倫理もまた命令のかたちをとる。生き延びたいなら言うことを聴け、そういう掟として倫理はある。

さてそこで、食べ物を与える／もらうというfeedの関係である。feedというのは、まずは「餌を与える」ことであるが、そこから「飼う」（飼育）という意味と「養う」（扶養）という意味とが派生する。「飼う」のは、ひとがひと以外の動物に餌を恒常的にやるということであり、「養う」というのはひとが別のひとを「食べさせる」ということである。この「食べさせる」はもちろん、文字どおりの餌を与えるという意味ではなくて、この社会のなかで生きていける最低の保障もしくは保護をするということである。この他動詞feedが自動詞になると、動物が物を食う、赤子が食事をするという意味になる。ひとがひとに食事を供するときはfeedとは言わない。つまり、赤子に食事を供するときには、英語では動物を飼うことに準じた物言いをするということである。言ってみれば、馴致といういとなみである。ここでは一方が他方の生殺与奪の権をにぎっているという、非相称の関係、カネッティによれば「命令」（＝死刑判決）の関係がある。

ひとは赤子のとき、食糧を母から受け取るというかたちで、和らげられた「脅迫」、和らげられた「買収」に応じざるをえない。つまり「自発的な虜囚」の名にふさわしく従順となることを強いられる。その脅迫の背後には死という刑罰がちらつかされる。そう

いうかたちで不服従が抑え込まれる。

おとな（要介護者）が食事を与えられる際に、その与えられ方に神経を研ぎ澄ます、あるいは震えさせるのは、じぶんがfeedされているのか否かが最大の関心事になるからである。「ひと」として「ある」こと、つまり「ひとりのひと」としてのじぶんの存在がそこで認められているということが判然としないことには、存在がもたないからである。「ひと」としてのリスペクトを受けているかどうか、それが食べ物そのものよりも大きな意味をもっているからである。ここで「ひと」というのは、「だれ」としてのひとの個別的な存在のことである。だれか特定のひとの意識の宛て先となっているような、代わりのきかない特異性におけるひとのことである。給食という、個人の嗜好を勘定に入れない食事は、「吟味」という、対象へと向かうひとの根元的な志向性を否定しているという意味で、それがどんなに凝った料理として供されても、「不味い」物である。そこでは「わたし」は、複数のひとりとして匿名のまま存在するしかないからである。介護者がおなじ食卓の別のメンバーに注意が向かっているときには、介護者がどれほどじぶんのために時間を割いてくれたとしても、供された食物は「わたし」には「不味い」物である。そのとき、「わたし」はそのひとの想いの宛て先にはなっていないからである。他者たちのだれのうちにもじぶんがなにか意味のある場所を占めていないと感じるとき、ひとは「わたし」の存在の消失という事態に立ちすくまざるをえない。だれかあるひとにその特異性においてふれるのではなく、交換可能なものとしてふれるというのは、E・レヴィナスの言葉を借りて言えば、「根源的不敬」なのである。

わたしが、赤子のように、たとえじぶんでは何もできない存在であっても、それでもfeedの対象としてではなくて、ひとりの「だれか」として遇されているかどうか、何をしなくともただ「いる」だけで「わたし」の存在に意味があるとされているのかどうか、それをひとは食事を供されるときその供され方に見届けようとする。いや赤子でさえそうだと、霜山は言っていた。食事を供するひとの意識がどこかへ行っているときにそれをそういう仕方で供される者が口を閉ざすのも、反対に「わたし」を愛でているひとによって食事を供されるときにほとんど至福といっていい想いに浸るのも、事態は逆だが、そこに賭けられているものは同一なのである。

根こぎというかたちで存在が塞ぐとき、わたしたちの感覚は、もはや対象ではなく、自身の麻痺へと向かう。そして存在がその足がかりをすべて失なったとき、それでも消え入る前にひとつ残されていることがあるとしたら、それは黙り込み、もしくは慟哭以外にないだろう。存在の最後の拒みは、徹底した失語、もしくは痙攣である。

そういう拒みが幾重にも折り重なった、そのあとである。ひとの存在の乏しさに、ほとんど僥倖のようにして、燻し銀のような艶が出てくることがあるのは。最後の痙攣であるはずのものを、それを最後とすることを許されなかった存在が、その最後の拒みを、意地と諦めが交互に綾なすその襞のあわいにもはや力みなく漂わせたとき、そこに渋味というものが醸成されてくる。そして、渋味は乳児が頑と受けつけないものである。わ

たしたちの存在の初動には見いだされなかったものである。「個体の判断機能はまず『それを取り入れるべきか吐き出すべきか』（有害か無害か）を判断すること（属性判断）に向けられ、それが在るか無いか（存在判断）は後回しにされる」とフロイトは考えたが、だとすれば、渋味はそれを超える判断であることになる。ひとはここで自己を超える。が、feedはその最後の可能性をもひとから奪う。

「口に合わない」もの、どうしても「いただけない」行動、どうしても「のめない」要求……どうしても譲れず、むずかるしかなかったことを、ひとは最後の拒みをも押し流されてきた果てに受け入れる。それが「諦め」に彩られた渋味という感覚である。これは「趣味」という名のひとつのたしかな判断である（テイストとは言うまでもなく「味わい分け」のことである）。「渋味には艶がある」と、原稿用紙の升目に書きつけたのは『「いき」の構造』の九鬼周造だ。「渋味は甘味の否定には相違ないが、その否定は忘却とともに回想を可能とする否定である」。剥がれの前、母が世界のすべてであったようなその存在の甘味を経て、ひとがいたりつくもうひとつ別の、寂れても艶のある味覚である。その艶に感応できたとき、ひとには別の世界が開かれる。もはや甘えではない甘味、もたれではない依存、九鬼の言葉を借りれば「色に染（そ）みつつ色に泥（なず）まない」という感覚である。そういう艶をもちえてはじめて、ひとは密着ではなく他者にかかわる仕方、そう「世話」や「思い遣り」や「抱擁」という文化を生んだのである。くりかえすと、その可能性じたいを奪ってしまうのが、feedというかたちでの自他の関係なのである。feedは、人間が最後の最後のところでなんとしても「いただけない」もの、「のめない」ものなのである。口を閉ざすこと、feedの対象となることを拒絶すること、つまりは賭けるまでもないほどはかない死をそれでも賭すこと、それは弱き者に残された最後の抵抗である。

5　口のためらい、口のくるい

それにしても、「食べる」というのは、よくよくどういういとなみなのか。「食べる」ということは、なぜ、生き物としての人間としてのみならず、「だれか」としての人間の存在の根幹にかかわるのか。

感情を導いたり、抑えたりすることについてのわたしたちの無力を「人間の縛り」と呼んだのは、哲学者のスピノザである。（ちなみに、スピノザの『エチカ』第四部の表題に掲げられたこの言葉は、サマセット・モームの小説の題にも用いられており、邦訳ではその Human Bondage が「人間の絆」と訳されているが、これは誤解を生みやすい訳だ。）こういう「縛り」はなぜか口を直撃する。「食べる」といういとなみが、感情のわずかな揺らぎのなかで、箍をはずされ、狂わされる。感情の浮沈にうろたえて、ひどい早食いになったり、逆に物をがんと受けつけなくなったりする。

魚菜に舌鼓をうつうち、しだいに老いさらばえて、固体への関心をなくし酒だけあれ

ば十分となり、その液体にもやがて関心を失い煙草さえあれば十分となり、しまいにはじぶん自身が気体となって、仏さまの線香と化す……などという、（多田道太郎一流の）枯れるような消え入り方も思い描けないわけではないが、実際には、わたしの父がそうであったように、ふと故郷の味を思い出したのかあの塩辛い雲丹のアルコール漬けを毎日一箱たいらげ、かと思うと隣りの患者への差し入れを見て、羨ましくて、どうしてもそれとおなじ饅頭が食べたくなり、それを主食は抜きに半月ただただ食べつづけるというように、食のコントロールを失ってしまうことのほうが、病院という慣れない空間のなかでは普通のことなのかもしれない。

口は不思議な器官である。からだの他の部位にはそれほど機能が重層しているわけではないのに、口にはわたしたちのさまざまないとなみが密集している。食べる、舐める、飲む、息をするだけではない。話す、笑う、泣く、唸る、歌う、そして愛玩する。つまり、食事、語らい、感情の表出、歌唱、そして性の交わり。どれひとつを欠いても、人生が成り立たないくらいに生きるうえで大事なことを引き受けている。だから幸福はここに集中する。おいしいものを食べ、酒を嗜み、喉を潤し、笑い声をあげ、心ゆくまで歌い、そして接吻する、あるいは他者の身体に吸いつく。不幸も、だから、ここに集中する。何を食べても不味く、言葉を吐き捨て、あるいは失い、歌を忘れ、身を合わすことを怖がる。

食べることの様態はおそらくこれら幸不幸のすべてとなんらかのかたちで絡んでいるのだろう。が、そもそも食べるという欲望じたいがやっかいなものである。腹が減ってくると、その足りなさに気持ちまで渇き、そわそわ、いらいらしてくるのに、腹がいっぱいになるととたんにどんなご馳走にも見向きしなくなる。どんな美味もわたしたちを誘惑しない。それどころか凝りに凝ったその姿がうとましくすら感じられる。性的な嗜好にもそのようなところはある。快を享けたあとの刺戟はこそばゆく、不快ですらある。が、それにしても、食とくらべるとまだどこか引きずるところ、執拗なところがある。

このように、寄せては引いてという、波のようなところが食にはある。この波はどこからくるのか。それはわたしたちの内部で起こっているはずなのに、わたしたちの意識にはまるで外部から、押し寄せてきたり、かき混ぜたり、突き上げたりするかのように受けとめられる。〈わたし〉のいのちのなかには、〈わたし〉よりももっと古い波や震え、渇きや疼きといったものがあるらしい。たぶんそれがわたしたちの意識の外にあるからこそ、そして「幸福」の根はそういう淵にあるからこそ、わたしたちは容易なことでは「幸福」のイメージが描けないのだろう。

6　捕まえること、弄ぶこと

先ほども少しふれたことだが、ある物の感触や肌ざわりを味わうために、わたしたちは掌を丸め、それを壊さないように、そうろっと撫でる。あるいは、手のなかで転がす。

が、これが生き物だと、愛撫と確認が、捕獲とかいたぶりという意味をもつことになる。虫を捕まえたあと、掌のなかに閉じ込める。愛犬なら、足首をぎゅっと握って掴み、そのうえでもう片方の手で毛並みをやわらかく撫でる。

食べるという行為はそのことをもっとむきだしにする。それは異物を体内に入れるという行為だからであり、そのために噛み、砕き、咀嚼するという行為だからである。

咀嚼するという行為は哺乳類の出現とともに始まるという。進化のそれ以前の動物は、異物を体内にそのまま呑み込む、あるいは濾過する。

異物の摂取、それは哺乳類では捕獲という意味をもつ。みずから動き、じぶん以外の生きものを捕獲することでしか生きられない。捕獲というまぎらわしい言い方はよそう。噛み砕き、磨りつぶし、嚥下することでしか生きられないのである。植物が太陽のエネルギーを蓄えつつ作った、炭水化物と脂肪という、三元素の化合物を集めて、それを体内に取り込み、通過させ、運動エネルギーとして消費することで、動物は生きる。生きるために、植物を食べ、あるいは植物を食べた動物を食べ、あるいは植物を食べた動物を食べた動物を食べつづけなければならない。ベルクソンのいうように、総体としてみれば、生命は「徐々に集めて急に消費するという二重のはたらき」である。

が、そういう言い回しはまだ外野席に立っている。栄養の摂取、それはあきらかに力の非対称のなかでなされる。「食べられるものはすべて権力の食物である」とはＥ・カネッティの言葉だが、口はまずは、捕獲し、潰す凶器なのである。あるいはこれは、自嘲が過ぎるといえないこともないが、「われわれ〔西欧人〕は、自分が食うものを軽蔑し、軽蔑するものしか食うことができない」と言い切り、そこから「われわれは、われわれが食うもの、食う行為、そして最後にはわれわれ自身の肉体にたいする軽蔑という視野のなかで、人食を軽蔑すべきものと考える」として、食うものと食われるものの抽象的な分離がカニバリズムの禁止を文明性のしるしとみるような西方の文化を作りあげてきた……と話をつなげるＪ・ボードリヤールのようなひともいる。ともあれ、西方の文化が食事の席で口を閉じること、音を立てないことを厳しく要求するのは、「口を開くことに含まれている脅迫的な要素が外に洩れでるのを最小限に食い止める」ためだというのは、ありそうなことである。西方の食の表象には、死と暴力の影が深く落ちている。

飢えが癒されたあと、食はいたぶりに変わる。餌を口のなかでころころ転がし、触感を味わい、味わいつくしてあとは吐き出すこともある。食の醍醐味は触感の組み合わせにこそあるとすれば、味覚は飢えを満たしたあとにくる、あるいは少なくとも飢えの不安が消えたあとにくると言ってよい。愛玩、いたぶり、味わい……。ここでも食は性愛に近い。

7　食の規則

回遊する魚、たとえばサケは、「故郷の川底で孵化後しばらく発生をつづけ、稚魚に成長してのち、いっせいに川を下って父祖伝来の〃餌場〃に向かう。ここでたら腹食うと、こんどは故郷の川を目ざして海洋を逆戻りする。腹中の卵巣と精巣はひたすら成熟をつづけ、河口に着くころはそれらがお腹に充満して腸は押しつぶされ、河をさかのぼるときはもう飲まず食わずとなる。こうして孵化地点にたどりついた雌と雄は、そこで産卵・放精をすませ、やがて静かに死んでいく。ここではだから、餌場で成長を終えるまでが食の相、故郷で受精を終えるまでが性の相となり、しかも当然、餌場は食の場だから、故郷は性の場となる」（三木成夫『胎児の世界』）。このように、多くの生命においては二つのうねりが波模様を描き、食（個体維持）と性（種族保存）がきっぱりと位相を分け、交替する。が、「食と性のけじめが消えた」人間は、食と性という「二足の草鞋」をはいて生きる。「“食い気”も“色気”ももはやごちゃまぜ」なのである。生命の箍が外れ、果てしのない技巧が食と性を貫通する。

味覚はだから、生命過程のある段階で発生すると言ってよい。先ほど述べたように、食の快はつきつめれば触感にあるとしても、ただたんに唇や舌、喉ごしの快ではない。口唇をその場所とする意識された快からしだいに外れてゆく体内の茫漠とした感覚、つまりはどろんとした熱と重みの感覚に、食うという経験の裾野はある。「口が、差異の認識を促す接触や通過、体内化などの短く強烈な体験を最初にもたらすとすれば、満腹は乳児に、中心的な広がり、充満、重みの中心といったようなより拡散した持続的な体験をもたらす」（D・アンジュー『皮膚－自我』）。これは味覚以前の感覚だと言ってもいい。乳飲み児にとっては、摂取はまずはそのように感覚されたにちがいない。現に母の乳は、あらためて味わいの対象としてみれば、うまい／まずいにカテゴライズすることの不可能な、言ってみれば噎せかえるようなたぐいのものだ。近すぎるからか。たぶんそうだとおもう。

これにたいして、味覚は食物への距離を前提とする。ちょうど、色の知覚なる言い方がすでに物へのある隔たりのなかでしかできないように。

> 赤い色の土は、熔融され、抽出され、ついには少量の鉄分やカドミウムや水銀の酸化物や硫化物の形になり、それがさまざまな添加剤にまで変容される。その過程で、赤い色の土はわたしたちから隔てられ、その代りに、もとの相をとどめない変容された顔料として眼の前にみていることになる。古代人にとっては、赤い土色というのが色覚にとって重要なのだが、わたしたちにとって〈赤い色〉は、実体とかかわりない抽象的な概念をさしている。この意味では、眼のまえに視える赤い土の色と、〈赤い色〉とのあいだには埋めることのできない差異が横たわっていることになる。
>
> （吉本隆明『初源への言葉』）

だから母乳はミルクではない。ミルク（牛乳）は、赤という色が顔料として血の色、陽の色、土の色から切り離されるように、牛から切り離されたひとつの飲み物である。だからミルクには味がある。ここで、ミルクを飲むという行為は他種の動物の乳を飲む行為だとは意識されていない。そしてというか、だからというか、乳児のときだけでなく、おとなになってもミルクを飲み、ケーキやチーズといった乳製品を食す。なのにそのおとなが、バリ島でひとりの乳母が左の乳首を赤子に、右の乳首を仔豚にふくませているのには驚愕する。まるでおぞましい光景を見るかのように。

咀嚼もまた、味を消えさせる。味は、食物のその触感とともに、それを口にしたときに立ち起こってくるもので、咀嚼し、攪拌しているうちに、体液と混ざりあって、うまくもまずくもない味へと馴らされてゆく。同化ということがそこでは起こるのだ。そして同化されたものは、もはや二度とあらたな食の対象とはならない。吐き出してもういちど食べなおすということはありえない。食物の消化は、二度と食せないものへの転化でもあるのだ。

ここがたとえば牛の、行きつ戻りつする咀嚼との違いであり、ひとに食のタブーが存在するゆえんである。かんたんな例をひとつあげてみる。コップの水を飲むには無数の仕方がある。ぐいと一息に飲む。いちど飲んだ水をコップに戻して、残りの水と攪拌し飲みなおす。それで口を漱ぎ、ふたたびコップに戻して飲みなおす……。こういうかたちで無数の飲み方があるのに、ひとは二番目以降の飲み方にひどく抵抗をおぼえる。体内に入るのは水とおのれの唾液だけなのに。

これは生理としての食が、人間においてはすでに意味の領域へと拉致されていることを示している。自己と他者、内と外、その境界を曖昧にするものを深く忌避するところが人間にはある。じぶんでもなければじぶんではないものでもないような曖昧なものを、ひとの喉は受けつけない。里の獣という他者を食すことはできても――ただし、野獣という絶対的な他者もまた忌避される――、ペットという「身内」は食すことができない。いうまでもなく、ここでも性は食に似ていて、人間において性交の対象となるのも、あくまで近隣の他者であって――異国人との婚姻はながらく禁じられてきた――、「身内」ではない。「身内」は、自己でも他者でもない曖昧な存在だからである。ちなみに、B・リーチによれば、侮蔑語というのもおなじ規則にしたがっており、ひとはもっとも憎々しい相手に向かい「権力の犬」「雌豚」などとペットや家畜の名で呼び棄てるが、まちがっても「ゾウ」や「カンガルー」などと言って相手を貶めたりはしない。

8　おわりに

口にはひとのほとんどの幸福と不幸が集中すると、先に書いた。それは、わたしたちの感覚や感情が意味というものを結び目として、たがいを跨ぎ越しあうからだろう。そしてその交点に、おのれ以外のものをからだに通すという、食べるいとなみがある。

ひとの生理は、意味を、あるいは解釈を深く孕む。だから、ひとの感覚には、そうとは意識されないままに記憶が深く折り畳まれているのだろう。味覚は頑固である。そして、ながらく忘れていた味が、それとは関係のないなにかをきっかけにふとよみがえる

瞬間があるのも、生理に蓄えられた記憶というものがひとにはあるからだろう。その記憶が、ときに生理をねじ曲げもしてきたのだ。その意味では、人間においては感覚にもまして、記憶というものが強くはたらくのかもしれない。そしてその記憶は、はるか内記憶にまで遡るものなのだろう。ひとは胎内ですでに、母親の腹壁ごしに〈社会〉を感知していたはずだから。

食べるといういとなみの、意味による、あるいは解釈による編みなおし。それゆえにこそひとにおいては、意味によって、解釈によって食がほころびるということが起こる。そういえば三度の食事。ひとは時間の定まった共食というかたちで、その秩序によって、おのれの食のほころびを、あるいは箍の外れを補修しようとしてきたのかもしれない。個食が食欲のコントロールを狂わせやすいのも、そのような理由によるとおもわれる。与謝野文子の言葉を借りていいかえれば、ひとのいのちが、「食べないと死ぬ」から「食べると死ぬ」という、飽食の異様なフェイズへと入りだしたのも、そう遠い昔のことではない。